

## テーマ「自主的な学生の育成」

### 1、テーマ選定理由

#### (1) 背景

大学へ進学することが当然となっている社会で、「大卒」という価値が以前に比べ下がってきている。また、大学でどんな学問を学んだかというよりは大学でどんなことを自主的に取り組み、そこから何を得たかという人間力を問われる時代へと変化しつつある。そこで、我々のグループでは社会が大学へ求めている役割として社会人基礎力（前に踏み出す力・考え抜く力・チームで働く力）を備えた学生の輩出であると考えた。そこで、大学は社会貢献を積極的に行える人材の育成、すなわち「人間力育成の場」であることが必要と考え、今回は大学生の自主性を育成することに焦点を当てていくこととした。

#### (2) 大学の現状

主体性が重視されている現代社会で、多くの大学では教員から学生へ知識を伝達する講義形式がほとんどで、講義の中で学生が自ら考えて行動する機会はまだ少ない。そのため、元々主体性をもって活動している一握りの学生は、他の受動的な学生から見れば、「異端」と感じられ、温度差が生まれている。その温度差によって元々自主的に動くことができる学生であっても、周りに流され受動的になってしまう可能性が高い。更に 18 歳人口の減少・社会全体として高学歴化を求める流れがあり、大学進学率が上昇しているという現状がある。変化のない入学定員に比べ、減少する受験者数、そしてなんとなく大学に進学する層の増加によって自発的でない学生の増加、ひいては自主性を育成できない大学像に拍車をかけている。結論として、大学は学生の自主性を育成することが困難な状態である。

#### (3) 解決策の検討と大学への提案

##### ①主体的な授業を必修科目に取り入れる

高校生から大学生になって、急に自主的に行動することは難しいためまずは大学側が機会を作り、体験してもらうことが重要と考えた。必修科目に取り入れることで、強制的ではあるが自主性を育成するきっかけにする。

##### ②教員にも自主的な学生の育成に参加してもらう

学生の様々な学びを育成する上で、教員と職員の連携は必要不可欠である。教員側から見た学生の姿を聞きながら、どのような講義等が必要なのかまた、学生のモチベーション向上を図るための工夫を考えていく必要がある。

## 2、大学のイノベーションの提案

### (1) 必修科目にアクティブ・ラーニングを取り入れる

アクティブ・ラーニングを必修科目に取り入れることをスタートラインにする。これをゼミ科目などに取り入れることで1年生から主体性を育むきっかけにすることができる。我々のグループではグループディスカッションに重きを置き、主体性の向上を図るとした。最初は与えられたテーマについて話し合い、次第に自分たちでテーマを考えそれについて議論していき、自主性の育成に繋げていく。また、行われた議論についての成果はポートフォリオ機能を搭載したポータルサイトへ提出し、教員から提出されたものについてフィードバックが行われる。これらの過程を繰り返し行い、最終的にはアクティブ・ラーニングを必修科目に取り入れなくても、学生が自ら時間も機会もすべて自主的に計画・実施できるようになってもらう。ここでポータルサイトを活用する理由としては、ポータルサイトが学生にとって身近な存在であり、また学生のデータを電子媒体で残すことにより学外にも学生の成果を公開することができるためである。

### (2) 教員のスカウト制度

これはゼミ科目の人数単位でファシリテーターを自分達の学びたい分野の教員に自分らで交渉をするというものである。知識・経験ともに豊富な教員をファシリテーターとすることで学生の興味のある分野について、専門性をより高めることができる。ここで重要なのは学生が先生へ直接交渉をすること、そして失敗を経験することである。学生生活の中で失敗を経験するという事は、ほとんどないためそれを体験することによって何を改善すればよいかということを自主的に考える機会となる。また、ここでいう教員は自大学の教員ことを指し、大きな失敗にならないようなセーフティネットの役割も兼ね備えている。

学生からアクションを起こし、興味のある分野を深く学ぶことができると同時に仲間と協力する楽しさをしることをできるためモチベーションの向上やチームワーク力の育成が望まれるのではと考える。

### (3) 知を地（域）へ

(2) を経験して得た交渉力や行動力を、社会や地域などの学外へ活かしていく。そこで、(1) で登場したポートフォリオを学外に公開し、蓄積した成果を「いつでも どこでも 誰とでも 簡単に」閲覧することができる。例えば学生からある地域もしくは団体へボランティアに行きたいと申し出があった時、申し出られた地域や団体はポートフォリオを見ることで学生の取り組みについて知ることができ、ミスマッチを減らすことにつながる。逆に、学生の取り組みを見た外部からこの学生に来てほしいというスカウト機能も兼ねることとなる。その結果、学生の行動の幅が広がり大学で得た専門的な知識を地域に還元し、積極的社会貢献のできる人材を育成することができるのだ。